

時評

雑草・害虫・病原菌 「招かれざる客」認めて

いつか、「雑草・害虫・病原菌」という本を書きたいと思っている。知人たちはみな笑って、「そんな本は売れないから書くのはよせ」という。確かに書名としては、これはおよそ不適當だ。こんな忌み嫌うべきものをタイトルにした本など、誰も手にしたいとは思えない。だがそれでも私は書きたいと思っている。

人類が農耕を覚えてからの一万年間、農耕の舞台である里には、雑草、害虫、病原菌などの「招かれざる客」が登場し人類を困らせてきた。彼らはいつの間にか里の住民となり、生産の妨げとなってきた。

除草剤などの薬剤の開発により、われわれは彼らを大きく追い詰めたつもりでいるが、それでも彼らはしぶとく生き残っている。いや、追い詰められれば、追い詰められるほど、彼らは狡猾に、また獰猛になった。はたして人類は彼らを撲滅できるのだろうか。答えは恐らく、『ノー』である。どうしてか。

作物や家畜をはじめ里にいる生き物たちは、何らかの意味で人間活動の産物である。「招かれざる客」たちも同じで、彼らももとをたせば人間が作ったものである。彼らは里ができたところからの住人なのである。

雑草も、太古には有用植物であったものが、人間がその価値を認めなくなったとたん排除されるようになったものが多い。

人口密度が高まり、また生産性の高い品種だけを狭いところで育てることで、害虫や病原菌は流行を繰り返すそのつど進化してきた。

家畜や家禽を大量に狭いケージの中で飼育続けると、鶏インフルエンザのようなかたちでやがては人間をもおそうことになりかねない。

招かれざる客を忌み嫌う感覚はきれい好きの感覚と一脈通ずるところがあるが、それにしても最近ちょっと潔癖に過ぎるのではないかと思うことがよくある。

きれい好きのどこが悪いかとしかられそうだが、それも行き過ぎればさまざまな弊害をもたらす。過度に潔癖になると異質なものを排除する力が働いて社会をどんどん住みにくくする危険性もある。

逆説的に見えるかもしれないが、ここは招かれざる客の存在も認めてみよう。そうすることで、多少農業生産は落ちるかもしれないが、その代わりに、彼らを排除するのに要していたエネルギーはずいぶん軽減されるはずだ。

今は、社会にそうしたおおらかさを回復することが、きれいさを多少犠牲にしでも大事なことではないかと私は思っている。